



東京部会(第145回)記録

日 時:	2025 年 6 月 21 日 (土) 15:00 - 17:00
場 所:	慶応義塾大学三田キャンパス東館 4 階オープンラボ
参加者:	会場13名、zoom11名、計 24名

- 1 松平裕介先生(八王子市立第二中学校)から「経済の視点を取り入れた地理的分野の授業」の報告があった。報告概要は以下の通りである。
- まず、今夏の経済教室のタイトルになっている VUCA の時代の確認があり、次に、地理の授業の構成の確認があった。この実践は、地理分野 A、B、C のうち C 日本の様々な地域のなかの(3)日本の諸地域の関東地方と(4)地域の在り方の部分の学習であるとの説明があり、地域の課題と世界・日本の諸地域の課題を往復させて、主権者としての問題解決を目指す授業を構想したとのことである。
- また、関東のなかの八王子を対象として、地理的な見方・考え方に経済の視点を入れて考察させる授業としたと説明があった。
- 授業は、中学2年生地理的分野で、7時間で実施。。
- 第1時、関東地方の自然環境を知り、人口集中と経済の発展を、単元を貫く課題とした。
- 第2時、関東地方に人口が集中してきた理由を考えさせた。
- 第3時、人口が集中することによってどんな問題が出たかを整理した。
- 第4・5時、関東地方の産業と人口集中の関わりに注目させ、探究活動を行わせた。
- 第6時、東京一極集中をどのように考えれば良いかの探究。教師が提示した資料をもとに、東京一極集中の良さ、課題、どちらとも言えないに分類して、班の意見を出し、自分の意見をまとめさせた。
- 第7時、学習のまとめとして「よりよい関東地方の姿」を考察するレポートをまとめさせた。
- 加えて、4時間の「地域の在り方」を調べさせ考えさせた。
- これは4時間のうち、1～3時間目は調査で、最後4時間目は発表と振り返りで地域の課題とその解決策を考えさせた。
- 授業の成果として、経済の視点を取り入れることで、人々の生活の視点から地域を分析でき、あるべき地域の姿を考えることができたが、人口、経済が全面に出てきて関東地方の地域的特色についての学習が不十分であったこと、全員が経済的な視点から考察できるようになっていないなどの課題が残ったと総括された。
- 報告を踏まえての質疑、検討の概要は以下の通りである。(Qは質問、意見、Aは松平先生の回答)
- Q:人口と経済の関係について学ばせたことは分かるが、集積の利益以外で経済を意識させることは考えなかったか?
- A:獲得させたかった経済の見方は産業の発達と生活の関連で、なぜそこにいるのか、インセンティブから考えさせた。
- Q:これまで地域振興で人口を分散させなければという議論があったが、にもかかわらずなんでヒトが集中するのか、高校の必修化された「地理総合」との接続も考慮して都市化の理由について考えさせるのが大事では。
- A:メリットがあるからここにいるという自分の立場にたって考えさせたかった。その意味ではデメリットよりメリットを考えさせる方がよいとして授業を組み立てた。
- Q:今の日本では産業構造が変わっている。関東地方でも海沿いの人口は減っている。それは二次産業の重化学工業製品を作らなくなっているからで、その変化をきちんと見せるべきではないか。例えば、八王子の近くの



厚木はトラック輸送の集積地になっているなど、大きな変化がある。

Q: 関東の学習と地域を接続させる学習は良いとして、関東も地域により特色があり、また、東京都心と八王子はまた違った様相がある。人口集中、これからの地域の在り方という生徒の取組み課題はアバウトで大きすぎないか。もっと細かくわけとりくませたらどうだろう？

A: 関東に関するそれぞれの特色はいろいろな学習の場所で触れているので、今回は一極集中にしぼってざっくりまとめた。なお、八王子の「桑都」としての歴史は3年の歴史分野の近代史で扱う予定である。

Q: 産業構造については、高度成長時代には産業振興のために地域集中を進める必要があったが、現在のサービス化によって就業構造が変わっている。その就業構造を調べてみると、何を軸にして人口集中が起こるかわかるのではないかな。

Q: それは国勢調査のデータで変化がわかるので調べてみると良い。

Q: この授業をもとに、夏の経済教室に参加した先生が切実性をもった授業をつくるとすると、どこを改善したらよいか、そんな提言のメールをおくってもらいたい。

Q: この授業では地域のフォーカスがうまくいっていないように思う。ただ、関東、東京、八王子とフォーカスを絞って学習はしてあるので、今度は逆にひろげて、日本全体の問題、世界との比較など、もうワンクール広げるともっと良い授業になるのではないかな。

A: スケール感をもう一度捉え直してみたい。

Q: 学習指導要領に指摘されている、地理的見方・考え方の5つの視点を具体化するように、授業構成をし直すといよいのではないかな。

A: 今後考えてみたい。

2 長谷川聡先生(東京都立新宿高等学校)から「岩井克人氏の資本主義論を活かした公民科授業実践」の報告があった。

報告の概要は以下の通りである。

金融教育研究校2年目の実践で、一年目は投資の意義についての授業をやり、それなりの成果があがったが、それが本当に金融教育の本質なのか、また、生徒にとって役立つものか疑問を持ち、文献を探索するなかで、根源的な問いである「資本主義とは何か」「将来働く会社が社会からもとめられているものは何か」「社会をよりよくするために私たちが行動すべきことは何か」という問いかけがある授業が必要ではという考えに至り、この授業を構想、実践した。

手がかりとなったのは、岩井克人先生の資本主義論と株主主権論を否定する会社論である。

授業は全5時構成して実践した。(高等学校2年生「公共」の授業)

第1時は、経済社会の形成と変容で、資本主義と企業について教科書レベルでの知識の整理をした。

第2時は、現代の企業で、現代の企業には利潤追求の他に何が求められているかを同じく教科書レベルの整理をした。

第3時は、これまでの内容を復習しながら、岩井氏の資本主義論を学ぶとして、『ベニスの商人の資本論』所収の「キャベツ人形の資本主義」の抜粋を生徒と読み、お金とは何か、資本主義とは、株式会社とは何かを読み取った。

第4時から、具体的企業の分析に入り、三井住友TG、三越伊勢丹HR、小田急電鉄の三社を対象にペアワークで「10年後の株式会社のあるべき姿」を構想する探究活動を行った。これらの企業は学校の所在地の新宿に関係のある企業である。



経済教育ネットワーク

Network for Economic Education



第5時は、ペアワークで作成した10年後の企業の姿をもちより6人から8人のグループでそれを練り上げて発表した。その提言を三社に送り(一社は直接授業に参加)コメントをもらうというプロセスを経て第一段階の学習は終了した。

その後、岩井氏の講演会「これからの会社のありかた」を校内で実施し、第一段階の授業のさらなる深化を行うことができた。

成果としては、これまでの金融教育とは異なり資産形成だけが金融教育ではないという新たな取り組みができ、外部企業との連携や講演会で生徒が新たな学びに取り組んだという側面を看取ることができたが、通常の授業のなかで外部との連携を実現するには、1年単位での授業計画がもとめられるということが課題となることが分かった。この実践を踏まえて、金融教育の多様性をさらに追究してゆきたい、と総括された。

報告を受けての質疑、意見の概要は以下の通りである。(Q及びAは上記と同じ)

Q:岩井先生の議論がどこまで生徒の発想をひろげたのか、変えたのか、それまでと違いはあったのか知りたい。

A:岩井先生の資料文が資本主義の在り方を説明している。これを生徒と読むことで、資本主義の特色をつかませた。それを踏まえて、サステナビリティに注目させて、10年後の企業の在り方を考えさせた。生徒は、企業はさらなる価値と差異が求められると提言していて、三社とも単なる利潤追求の組織ではないという点に気づいていると思う。

Q:授業全体として、前半の資本主義論と後半の「10年後の企業の在り方」という企業の事業改革の追究が一貫しておらず、分断されてしまっているのではないかと。また、紹介された2時間目と5時間目終了後の生徒の変化はわかるが、データはこれだけなのか？

A:3時間目の資料の購読のなかで、教科書での企業の捉え方と岩井先生の企業はモノとヒトの二階建てであるという構造の対比に関しては触れている。加えて、講演会も設定して一貫性を持たせるようにできたと思う。生徒の変化は、講演会に全員参加していないので抽出になってしまっている。データは全部あるので、分かる範囲で精査したい。

Q:企業は新宿の三社だけなのか？

A:いろいろな企業に声をかけたが断られ続け、やっと三社に協力願うところまでいったのが実情。企業にとっては具体的な事業改善を提案されても応答するのはすんなりゆかないのだろうと思った。

Q:他の学校は同じようなことをやるにはどうしたら良いと思うか。

A:今回は授業の3ヶ月前から動いたが、企業へのオファーなどは一年前くらいから行っておいた方がよいのではと感じている。

Q:実践として素晴らしい取り組みであることは前提だが、前半と後半がつながっていないのは当然。なぜなら、岩井さんが考えている企業を現実の企業は実施していないから。岩井さんが考えているのは経済の本質で、現実の企業の活動とは議論の次元が違う。

それはさておき、提案が二つある。一つは、松島さん、宇沢さん、岩井さんのように経済の本質を語っている人たちの論文を読み解く勉強会をネットワークの有志でできないかということである。今回資料としてとりあげられた『ベニスの商人の資本論』も含めて、高校生に分かるものがあるはずで、それをみんなで検討して、授業に使えるものにする、落とし込むことができれば生徒の経済理解に資するところが多いのではないかと。

もう一つは金融教育の再検討をぜひして欲しいということである。長谷川先生が今の金融教育の在り方について疑問をもってこの授業を作り上げた問題意識は強烈に良いことだと思う。資産形成や金融商品の扱いは社会科や公民科で扱う内容でなく、金融を通して経済の本質を教えることが社会科の役割であるはずで、何が生徒の



経済教育ネットワーク
Network for Economic Education



ためになるかを考えて金融の教育を構想して欲しいと思う。

Q: 提言だが、企業の分析をもうすこしひろげるなら、株式学習ゲームなどに参加させて、そこから考えさせるのもよいのではないか。

A: 皆さんの指摘を踏まえて、さらに考えてみたい。

3 夏休み経済教室の取組み状況に関して、吉村慈子氏及び斎藤史貴氏(東京証券取引所金融リテラシーサポート部)より報告があった。

・6月20日に東証のHPにアップして、すでに20名ほどの申込みがきている。来週はじめには各学校宛のチラシを送付する。今後の広報、宣伝に協力いただければ有り難い。

・今年は東京中学会場が100名募集と小さいのでいろいろ工夫をして収容するのでご迷惑をかけるかもしれないがご理解いただきたい。

・登壇者の資料の回収のルートをもう一度確認していただければ有り難い。

今回の東京部会は、二本の報告を時間をかけてじっくり検討ができ、夏休み経済教室に向けての準備及び、これからの取組みの課題の示唆にとんだハイレベルな部会であったと言える。

記録と文責: 新井

次回開催予定: 9月13日(土) 15時00分～17時00分

場所: 慶応義塾大学三田キャンパス研究棟1階B会議室

内容: 夏休み経済教室の総括、授業実践の報告、検討など